



第 177 号

二〇二五年七月三〇日発行
発行者 奈良県立
橿原考古学研究所
奈良県橿原市畝傍町一番地
編集者 清水 康二

奈良県藤ノ木古墳出土品の 再修理事業における四年次の取り組み

奥山 誠義

一、はじめに

国宝奈良県藤ノ木古墳出土品保存修理事業（以降、本修理事業と称する）は国有文化財等（美術工芸品）保存修理事業の一環として文化庁により計画され、国宝藤ノ木古墳出土品修理検討会の指導を受け、二〇二一年度より奈良県が受託者としておこなっている。二〇二四年度に四年次の事業として実施した概要と成果について報告する。

二、修理事業四年次の対象品

四年次の対象品を表1に示した。三年次（二〇二三年度）からの継続作業品を含む。また、三年次に修理した鞍金具前輪（Bセット）ほかに、安定台と収納箱の作製について、安定台と収納箱の作製を四年次の基本工程とした。

三、本体修理の工程と方法

本修理事業の工程は、過年度三年間の修理事業（表2）と同様であるため詳細は割愛するが、若干触れておきたい。安定台作製は対象品の形状に合致した支持台を必要とするが、本修理事業では対象品から直接的な型取りはおこなわず、三次元形状計測データを利用して複製品を作成し、その複製品を基に間接的に型取りをおこない支持台を作製した。

四、個別の対象品への対応

一部の資料について個別の対応をおこなった例をここで挙げておく。紙幅の都合から網羅的に示すことができない点はご容赦願いたい。

① 鐘形杏葉…一部の鐘形杏葉は、地板と透かし板が離れているものがあ

表2 修理の工程

事前調査	写真撮影 構造調査（透過X線撮影） 状態観察と記録作成
本体修理	クリーニング （ドライ、有機溶剤使用） 樹脂強化 既存接合修正・新規接合 充填・補強
事後調査	写真撮影 透過X線撮影 記録作成 三次元形状記録作成
安定台・保存箱作製	

表1 四年次（2024年度）の対象品

【本体修理】	
石棺外	鐘形杏葉（Bセット、2か年計画のうち2年目）、鐘形鏡板付轡（鏡板本体・残欠/Bセット、3か年計画のうち2年目）、鞍金具前輪（Cセット）、環状鏡板付轡（Cセット、3か年計画のうち2年目）、雲珠（Cセット）、鉄地金銅張鉸具（B/Cセット、2か年計画のうち1年目）
石棺内	大刀2（2か年計画のうち1年目）、大刀3（2か年計画のうち1年目）、金銅花卉形飾金具、銀半球形空玉、銀鍍金梔子形空玉、ガラス小玉（玉簾：4か年計画のうち3年目）
【安定台座・箱】	
石棺外	鞍金具前輪（Bセット）、鞍金具後輪（Bセット）、居木飾金具、鐘形杏葉（Bセット）、雲珠（Bセット）、壺蓋（Bセット）、鉄製兵庫鎖

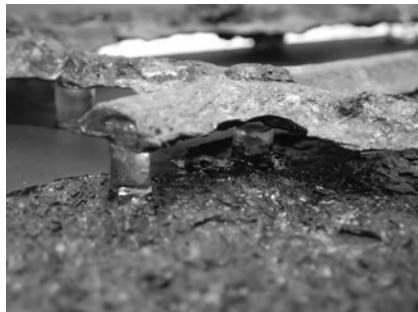


写真1 柱状のパラロイド
B72による固定

たが、部分的に接着・固定し、大きく隙間が空いた部分には、柱状のパラロイドB72を用いて固定した（写真1）。また、細片化した金銅板片（六二片）の接合検討をおこなった結果、四三片を接合することができた。その接合部分は楮紙をパラロイドB72で貼り付け補強した。地板の欠失があるもので構造的に不安定なものについては必要に応じて地板欠失部の一部をエポキシパテにより充填した（写真2）。

目次

奈良県藤ノ木古墳出土品の
再修理事業における四年次の取り組み
「百済大宮」考
北野ウチカタビロ遺跡出土の縄文土器
橿原考古学研究所研究記
信立祥博士を偲んで
ひとの動き、ほか

奥山 誠義
見 泰 寿
村 昇・松田真一
木 企 雨
朱 雅
編 集 者
111098531

②鐘形鏡板付轡…これまでの四カ年の修理事業の中で初めて脱塩を実施した対象品である。破片類の一部に進行性の錆とそれらによる亀裂や剥離の発生が認められたので、四片についてセスキ炭酸ナトリウム水溶液浸漬による脱塩を実施した。

③雲珠・鉢と脚の取り付き部分に亀裂が認められた箇所が複数確認できた。亀裂部分はパラロイドB72溶液の充填あるいは糸状に成型した強化樹脂をはめ込み、溶剤で溶かしながら充填した(写真3)。脚部鉋頭や責金具には銀装の遺存部分が散見された。責金具には銀(Ag)のひげ状結晶(Wisker・ウィスカ)が認められた(写真4)。このひげ状結晶は、

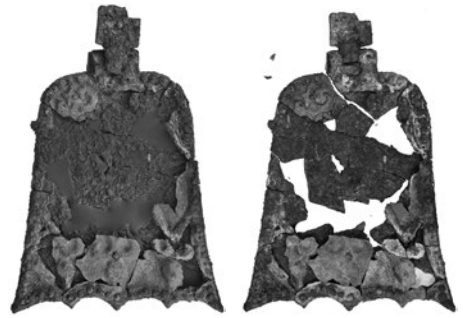


写真2 鐘形杏葉
(左:修理後 右:修理前)

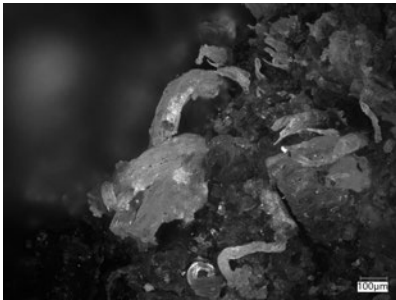
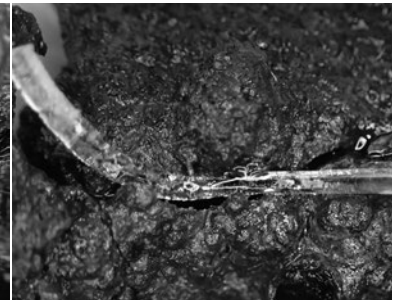


写真4 銀装部分のヒゲ状結晶



写真3 雲珠の亀裂(左:強化後 右:強化前、充填する糸状の樹脂)



X線回折(XRD)分析の結果、 ΔAgCl (塩化銀)を検出した。また、これらを走査電子顕微鏡付帯の元素分析装置により観察した結果、AgとClの分布が認められ、このひげ状結晶がAgClから成ることを確認した。

④金銅花弁形飾金具…いずれも金銅板が薄く、注意深い作業を必要とした。接合可能な破片はパラロイドB72により接合し、接合部は楮紙による面的な補強を実施した(写真5)。

⑤大刀2及び3…発掘時より複数の破片に分かれており、それを組み合



写真5 金銅花弁形飾金具
(左:修理後 右:修理前)

わせる状態で復元、保管されていたため、現状の把握が必要であった。そこで、簡易的な観察をおこなうとともに、現状の高精細三次元形状計測をおこなった。大刀2及び3は、現状確認と記録を終えた後、解体可能であることを確認し、安全に解体した。

⑥ガラス小玉(玉簾)…現状の精密な状態の記録のため、修理事業開始時の天面に対して実体顕微鏡による観察をおこなった。約一七〇〇枚に及ぶ顕微鏡写真によって細部を記録した。

四. おわりに

本事業四年次は、鉄地金銅張り製品や金銅製品、銀製品、大刀、ガラス製品と多岐にわたる材質、構造を持つ出土品が対象となった。

今後十年近く続く本事業を安全かつ確実に実行することで、藤ノ木古墳出土品を将来へ継承する礎とした。

註

(1) 河崎衣美二〇二四「奈良県藤ノ木古墳出土品の再修理事業における三年間の経過報告」『青陵』一七四号

「百済大宮」考

鶴見泰寿

一 はじめに

令和五年に実施された飛鳥京跡第一九〇次発掘調査において飛鳥宮跡Ⅰ期遺構が新たにみつかった。現地説明会資料によると掘立柱塀SA〇二三〇一は、これまで周辺で確認されているⅠ期遺構と同様に東で北へ約二五度の振れを持つ一三間以上の柱穴列（柱間は約二・七m）で、柱痕跡や柱抜き取り穴には、赤褐色の焼土や炭化物が多く混じるとい

う。^①

Ⅰ期遺構は舒明天皇の飛鳥岡本宮に比定されている。第一九〇次調査によってⅠ期遺構Ⅱ飛鳥岡本宮が一定の範囲に規則的に展開したことが明らかになり、実態の解明が困難であった七世紀前半の宮について研究を進める糸口をつかむことができた。ここでは、舒明天皇のもう一つの宮である「百済大宮」について若干の考察をする。^②

二 舒明天皇の宮々

『日本書紀』によると、舒明八年（六三六）六月に火災により岡本宮

が焼失し、その直後に田中宮へ遷った。さらに厩坂宮（橿原市石川町付近）に遷り、最終的に百済の地に寺と宮を造営した。百済宮に関しては『日本書紀』に関連記事がみえるので、以下に列記する。

①舒明十一年（六三九）秋七月、詔曰、今年、造作大宮及大寺。則以百済川側為宮処。是以、西民造宮、東民作寺。便以書直県為大匠。

②舒明十一年十二月 是月、於百済川側、建九重塔。

③舒明十二年（六四〇）十月 是月、徙於百済宮。

④舒明十三年（六四一）冬十月己丑朔丁酉、天皇崩于百済宮。

⑤舒明十三年十月 丙午、殯於宮北。是謂百済大殯。是時、東宮開別皇子、年十六而諱之。

三 「百済大宮」の位置について

①②からは百済川の畔に大寺と大宮がセットで造られたことが知られる。百済の大寺については吉備池廃寺（奈良県遺跡地図 14B0323）であることがほぼ確実であるので、

大宮も吉備池廃寺の近くに求められる。大宮は①で「百済川の側」に造られたとあるが、右岸か左岸かは判断としない。また①に「西民は宮を造り、東民は寺を作る」とあることが寺と宮の位置関係を示すものとすると理解もあり、吉備池廃寺の北西にある桜井市吉備の微高地にその場所に求めることを妥当とする。^③

小澤毅氏は「百済大寺と対になって造営された百済宮については、いまだその遺構を確認するにいたっていない。ただ、「西の民は宮を造り、東の民は寺を作る」という『日本書紀』舒明十一年（六三九）七月条の記事が、両者の位置関係を示すものだ」とすれば、百済宮は百済大寺の西側に存在したことになる。地形的には、吉備池廃寺の寺域北半から西北西に向かって、現在の吉備の集落がある高燥な微高地がのびており、それを中心とした地域が有力な候補となろう」と述べている。^{④⑤}

飛鳥浄御原宮までの七世紀の宮の立地は平地の中央に独立して営まれる例はまれで、河川と丘陵に挟まれた場所に立地するとみられる例が複数ある（例えば飛鳥宮跡、稲渚宮殿遺跡、川原寺下層遺構、宮滝遺跡、雷丘東方遺跡、脇本遺跡など）。ま

た用明天皇の磐余池辺雙槻宮は磐余池のほとり（池を囲む丘陵沿いか）に立地したと宮号から推測される。磐余池の推定地については橿原市による発掘調査で古代の池が存在することが確認できた橿原市東池尻・池之内や桜井市谷などの諸説があり、ここではこれ以上言及しない。磐余地域については前述の「吉備池廃寺発掘調査報告」が解説しているのでそちらに譲るが、磐余・百済は同一の地域か近接する可能性が高い。

上に掲げたような七世紀の宮殿遺跡の立地の事例から、百済宮も河川と丘陵に挟まれた立地である可能性が高く、南側に丘陵がある百済川左岸に位置したと想定してよい。⑤には舒明天皇の殯が宮の北で行なわれたと明記される。百済宮が百済川と丘陵に挟まれた立地であったと推測すると、想定される百済宮の立地では宮の南方が丘陵となり殯宮を営むには適さない。したがって宮の北、すなわち宮の北を流れる百済川のほとりで舒明天皇の殯が行なわれたと考えてよいだろう。さらに言えば、大宮と大寺は百済川を挟んで南北に並ぶように立地し（百済大寺Ⅱ吉備池廃寺は百済川Ⅱ現在の米川の北に位置する）、百済大殯は百済川の河

畔で対岸に大寺を望むような場所で大に営まれたと想像することもあるだろう。

さて、『万葉集』巻一第二番は舒明天皇が香具山に登って国見した歌である。この時の舒明天皇の宮は百済宮であったと考えるのが妥当であろう。また敏達天皇は敏達四年（五七五）に詔語田幸玉宮に遷るまでは百済大井宮にいた。小澤毅氏は『日本書紀』敏達元年（五七二）四月条の百済大井宮も、前後の宮室の所在からみると、この近辺に存在した可能性が想定されるので、あるいは舒明の百済宮の下層に存在するのかもしれないとする。百済・磐余地域でも、飛鳥宮のように重層的に天皇の宮が造営された可能性も考慮しておくべきであろう。

上のような諸条件を考えると、百済宮の所在候補地は従来の説に加えて『奈良県遺跡地図』14B0026付近（桜井市橋本、池之内）に求めるのも一案であり、その周辺に他の天皇の宮も存在した可能性が高い。

四. おわりに

舒明天皇が飛鳥を離れた後、宮を幾度か遷したものの飛鳥には戻らなかったことをもって、舒明天皇が蘇

我氏と対立関係にあり、蘇我氏に對抗するように大寺・大宮を造営したとするのが通説となっている。最後にこの点について若干言及したい。

⑥舒明八年（六三六） 秋七月己丑朔、大派王謂豊浦大臣曰、群卿及百寮、朝参已懈。自今以後、卯始朝之、已後退之。因以鐘為節。然大臣不從。

この記事は大派王の提案を蘇我蝦夷が受け入れなかったことを示しているが、天皇と蘇我氏の争いではない点に注意すべきである。また飛鳥岡本宮焼失後の『日本書紀』の記事を精査しても、舒明天皇と蘇我氏の間に政治的決裂があったことを示す記事はみられない。

⑦舒明十一年（六三九） 秋九月、大唐学問僧惠隱・惠雲、從新羅送使入京。

⑧舒明十一年 冬十一月庚子朔、饗新羅客於朝。因給冠位一級。

⑨舒明十二年 冬十月乙丑朔乙亥、大唐学問僧清安・学生高向漢人玄理、伝新羅而至之。仍百済・新羅朝貢之使、共從來之。則各賜爵一級。

舒明天皇は⑨と同じ月に百済宮に遷ったことが③から知られるが、③と⑨の前後関係は不明である。いずれにせよ、このように外交などの政治的に重要な行事は舒明朝後半にお

いても滞りなく行なわれたと考えられる。

また①には宮殿・寺院の造営従事者を広く動員したことがみえるが、果たしてこれらの事業を七世紀前半の天皇家だけで（大臣とは乖離した状態で）実施することは可能だったろうか。むしろ天皇と群卿の総意として行なわれたと考えるのが妥当である。さらに、宮が飛鳥を離れたとしても、政治的対立のみでなく他の事情も想定すべきであり、例えば百済は磯城・磐余に近接、または同一の地域であり、以前から天皇が宮を営んだとされる地域であるので宮を置くことは不思議ではない。

次の皇極天皇も即位後は小墾田宮に遷るまで（皇極元年（六四二）一二月まで）は百済宮にいたらしい。皇極元年九月に近江と越の大夫を動員して百済大寺造営の継続を決定したのも百済宮との関係が一因であるとみられ、即位後ただちに宮を飛鳥に戻すつもりではなかったように思われる。皇極天皇は小墾田宮（皇極元年一二月／皇極二年四月）を経て飛鳥宮に戻ることとなるが、『日本書紀』で蘇我氏の専横が記される皇極朝においても飛鳥板蓋宮の造営を百済大寺造営と並行して行ない、広

範囲から人々を徴発できたということとは、宮や寺の造営は政治的緊張関係とは別次元のことと捉えた方がよいように思われる。

謝辞

本稿は令和六年三月二二日に開催された橿原考古学研究所第三七一回研究集会で報告したもので、当日は小澤毅氏から貴重なご助言をいただきました。末筆になりましたが記して感謝いたします。

註

① 橿原考古学研究所二〇二三『史跡飛鳥宮跡（飛鳥京跡第一九〇次調査）現地説明会資料』

② 『日本書紀』は「大宮及大寺」と列記する一方で「百済宮」とも表記する。

③ 奈良文化財研究所二〇〇三『吉備池廃寺発掘調査報告』

④ 小澤毅二〇一八『古代宮都と関連遺跡の研究』、相原嘉之二〇二三『飛鳥・藤原の宮都を語る』など

⑤ 註3文獻

⑥ 橿原市東池尻・池之内（和田萃）、桜井市谷（千田稔）上ツ道の西、相原嘉之「上ツ道の東」など。

⑦ 註3文獻

北野ウチカタビロ遺跡出土の縄文土器

村上 昇・松田真一

一 はじめに

北野ウチカタビロ遺跡は、奈良県山辺郡山添村大字北野字ウチカタビロほか（当時）に所在し（第1図）、奈良県北東部に広がる大和高原のほぼ中央を流域とする木津川支流の布目川沿いの河岸段丘上に立地する。遺跡付近において、布目川は北向きから東向きへ大きく流れを変えており、遺跡はその右岸の河岸段丘上（標高二七七～二八二m）に広がる。布

目ダム建設に伴い、奈良県立橿原考古学研究所により一九八九～九〇年

度にかけて緊急発掘調査がおこなわれ、縄文時代から中世にかけての遺構と遺物が確認されている（松田編二〇〇三）。縄文時代については早

期の押型文土器期を中心に、草創期から後期の遺構と遺物がある。同じく布目ダム建設に伴い発掘調査がおこなわれた桐山和田遺跡と共に、近畿地方周辺では類例が乏しい縄文時

代草創期のまとまった事例である。本稿では、北野ウチカタビロ遺跡出土の縄文時代草創期の土器について、特徴的なものを抽出して紹介する。

二 遺跡の概要

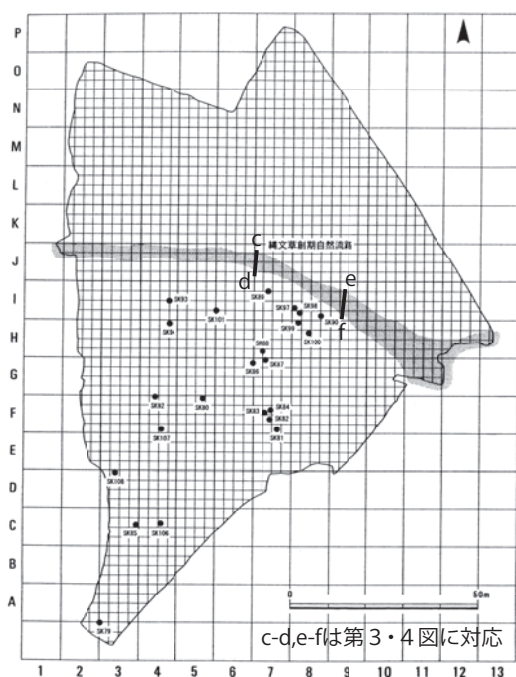
調査区は、南北約一九〇m、東西約一一五mの範囲である（第2図）。北東に向けて緩やかに傾斜し、中央付近を西から東へ流れる自然流路が横切る。調査区内の基本層序は、基盤層である6層（黄褐色砂質土）の上に、5層（黒褐色砂質土）、4層（黄褐色系砂質土）、3層（灰茶褐色

系砂質土）、2層（灰褐色土、床土）、表土（灰褐色粘質土、耕作土）と堆積する（第3・4図）。この内、5層は5a層から5e層に細分され、5a層（黒褐色土）と5b層（暗灰褐色土）、5c層（黒褐色土）からは縄文時代早期の、5d層（暗灰褐色土）からは早期と草創期の遺物が出土している。5e層（黒褐色土）は出土遺物が乏しいものの、草創期の堆積層と考えられる。

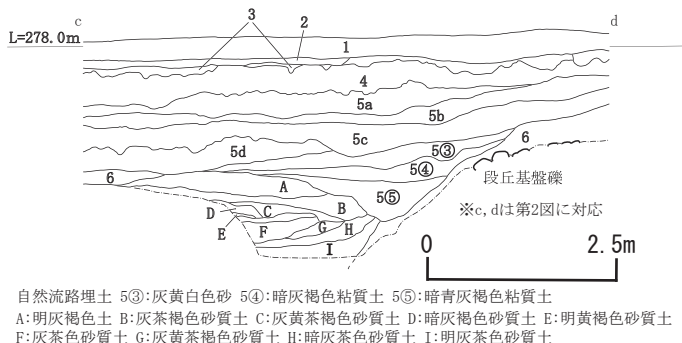
調査区を横断する自然流路は、6



第1図 位置図 (S=1/10,000) 国土地理院地図に加筆

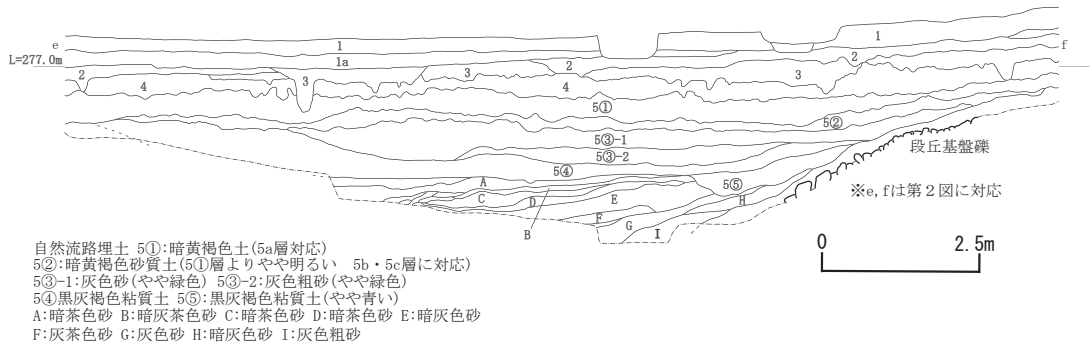


第2図 調査区グリッド配置図 (S=1/2,000) (松田編2003に加筆)



自然流路埋土 5③: 灰黄白色砂 5④: 暗灰褐色粘質土 5⑤: 暗青灰褐色粘質土
A: 明灰褐色土 B: 灰茶褐色砂質土 C: 灰黄茶褐色砂質土 D: 暗灰褐色砂質土 E: 明黄褐色砂質土
F: 灰茶色砂質土 G: 灰黄茶褐色砂質土 H: 暗灰茶色砂質土 I: 明灰茶色砂質土

第3図 自然流路土層断面図 (c-dライン) (S=1/100) (松田編2003をトレースの上、加筆)



第4図 自然流路土層断面図(e-fライン)(S=1/120)(松田編2003をトレースの上、加筆)

層を削平し、5d層に覆われる。埋土は5①層から5⑤層に分層され、5④層と5⑤層を中心に草創期の遺物が出土している。

なお、草創期の遺構と遺物が限られることから、当時の生活面は残されておらず、遺物の多くは二次堆積とされている(松田編二〇〇三)。

三. 出土土器(第5図・第1表)

包含層出土 1は、4G-9区5d層から出土した隆起線文土器である。口縁部は若干内弯気味に立ち上がり、その端部外面には横方向に連続する摘まみ加わる。その下には密接して横走隆起線文が3条巡り、同じく連続した摘まみ加わる。宮崎県堂地西遺跡例に酷似し、桐山和田遺跡A-1類の原形と考えられる。

2は、9G-14区5d層から出土した隆起線文土器である。厚い器壁を持つ口縁部片で直線的に立ち上がり、端部を丸く収める。口縁端部外面には、大振りの断面三角形の隆起線が巡り、その上面には間隔を開けて棒状工具による押圧加わる。後述する7・8と同一型式と考えられ、特に8とは同一個体である可能性がある。

いずれも桐山和田遺跡には類例が見られない。隆起線文の形状から、南九州地域との関係性が考えられる。

3は、10H-10区5d層から出土した底部片である。器面への加飾は無い。平面形円形の平底から内弯気味に器壁が立ち上がる、小型の深鉢と考えられる。本資料には接合の際に生じた歪みがあるが、実測の際にこれを補正できなかった。本来の器形は、掲載図面よりも外側に開きながら器壁が立ち上がると考えて良い。

器壁は厚く、胎土には直径2mm程度の砂粒と繊維痕が多数認められる。器面調整は、内外面ともにナデ調整であるが、特に外面の調整は丁寧で目立った起伏は認められない。

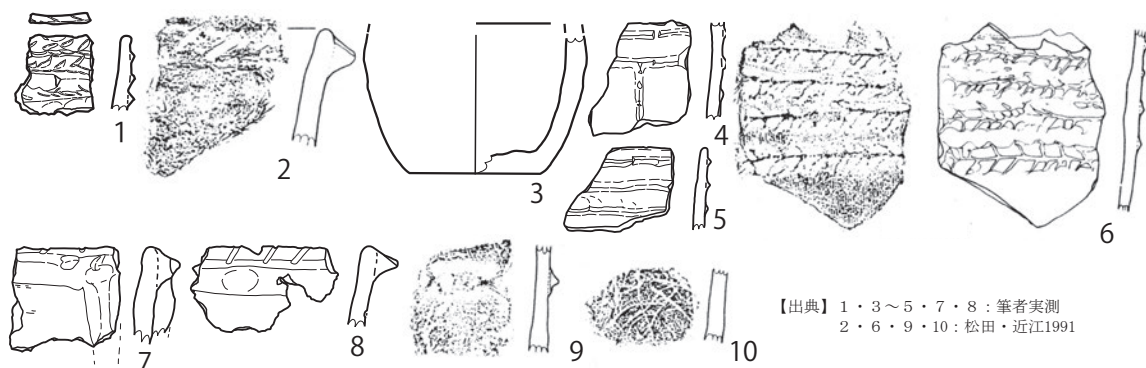
自然流路出土 4は、自然流路5⑥層から出土した隆起線文土器である。

口縁部を欠き、若干内弯気味に立ち上がる。丁寧なナデ調整された外面には間隔を開けて二条の隆起線が横走し、これに垂下隆起線が接続する。文様構成と器壁の立ち上がり具合から、口縁部に近い部位と考えられる。各隆起線は、細い粘土紐の両側面をナデ付けることで器面に貼付されている。内面の調整は、ナデ調整である。

5は、自然流路5⑥層から出土した隆起線文土器である。口縁部は直線的に立ち上がり、端部はやや丸く収める。ナデ調整された外面には間隔を開けて三条の隆起線が横走する。胴部を欠くため、これより下位の文様構成は不明である。各隆起線は細い粘土紐の両側面をナデ付けることで器面に貼付されているが、痕跡から左方向へナデ付けられていることが分かる。これは九州地域の隆起線文土器に認められる逆位の土器扱いによる施文である(大塚一九九〇など)。

6は、自然流路5⑤層から出土した隆起線文土器である。器壁は概ね直線的に立ち上がるが、下位は若干内弯する。文様の配置から、口縁部に比較的近い胴部上位の破片と考えられる。外面は丁寧なナデ調整が施され、上位から中位にかけて巡る横走隆起線文には連続した摘まみ痕が残る。器面に粘土紐を配置した後、連続して摘まむことで貼付したと考えられる。

7は、自然流路5⑤層から出土した隆起線文土器である。厚い器壁を持つ口縁部が直線的に立ち上がり、端部付近が若干内弯気味となる。口縁端部は丸く収める。ナデ調整された外面の口縁端部に沿って大振りな断面三角形の隆起線文が横走し、



【出典】 1・3～5・7・8：筆者実測
2・6・9・10：松田・近江1991

第5図 北野ウチカタビロ遺跡出土土器 (S=1/3)

第1表 土器観察表

No.	出土 地区	出土 層位	胎土	色調 (内面/外面)	桐山和田遺跡 での分類	備考
1	4G9	5d	緻密	暗茶褐色 /黒褐色	—	桐山和田遺跡での 分類A-1類の原形、 光石2001 p. 41
2	9G14	5d	砂粒多し	暗灰褐色 /案灰褐色	—	松田・近江1991 図8-5
3	10H10	5d	砂粒と繊維 痕多し	灰茶褐色 /灰灰褐色	—	平底の底部片
4	9I7	自然流 路5⑥	緻密	暗茶褐色 /灰茶褐色	A-2	光石2001 p. 41
5	9I7	自然流 路5⑥	緻密	暗茶褐色 /灰茶褐色	A-2	光石2001 p. 41
6	10H12	自然流 路5⑤	緻密	暗灰褐色 /案灰褐色	A-1	松田・近江1991 図8-1
7	10H4	自然流 路5⑤	砂粒多し	暗灰茶褐色 /黒褐色	—	
8	10H14	自然流 路5⑤	砂礫多し	黒褐色/黒褐色 ・灰褐色	—	
9	10H7	自然流 路5⑤	砂礫と繊維 痕多し	黒褐色 / 暗灰褐色	—	松田・近江1991 図8-3
10	10H4	自然流 路5④	砂礫と繊維 痕多し	暗灰褐色 /案灰褐色	C-7	松田・近江1991 図8-4

これに垂下隆起線が接続する。隆起線の両側にはナデ調整が施されるが、おそらく隆起線を摘みナデているのだらう。横走隆起線には、何らかの工具によると思われる押圧痕が残る。このほか、口縁端部と一体化している隆起線の上側面には、棒状工具による押圧痕が残る。2・8とは同一型式と考えられる。

8は、自然流路5⑤層から出土した隆起線文土器である。厚い器壁を持つ口縁部が直線的に立ち上がる。口縁端部外面には、両側面を摘みなでること大振りの横走隆起線文

を貼付している。隆起線文の断面は三角形状で、上面には間隔を空けて棒状工具による押圧が加わる。隆起線文の形状と配置などから、2と同一体の可能性がある。

9は、自然流路5⑤層から出土した隆起線文土器である。胴部片で、器壁は直線的に立ち上がり、胎土に繊維痕が顕著に残る。横走隆起線文が一条巡り、これに押圧が加わる。平底を呈する3と共に、駿河湾周辺に分布する葛原沢I式との関係性の中で解釈すべきかもしれない。

10は、自然流路5④層から出土し

た無文の小片である。緩やかに内湾することから、比較的底部に近い、胴部下位の破片であると考えられる。胎土に顕著な繊維痕が残る。

四. おわりに

以上、北野ウチカタビロ遺跡出土の縄文時代草創期の土器を紹介した。桐山和田遺跡と比較すると(松田編二〇〇一)、4・5がA-2類(横走隆起線の圧痕が目立たず、口縁端部がやや外反し、垂下隆起線を伴うもの)に、6がA-1類(横走隆起線の上下に連続する圧痕が残るもの)に、10がC-7類(厚手で胎土に繊維痕が顕著に残るもの)に相当する。3の平底片もC-7類に含まれる可能性があるが、前述のように他地域に由来する土器の可能性も考えられる。両遺跡については、遺跡間連鎖の中で捉える見解があるが(光石二〇〇一)、共通する類型の土器の出土などから、集団の回帰的遊動により形成されたものと考えたい。資料の位置付けとともに、近接する二つの遺跡の評価が、今後の課題とならう。

参考文献

大塚達朗一九九〇「隆起線の比較から見

た九州と本州「序章」』『縄文時代』
第一号

松田真一編二〇〇一『桐山和田遺跡』奈良
県立橿原考古学研究所

松田真一編二〇〇三『北野ウチカタビロ
遺跡（遺構編）』奈良県立橿原考古学
研究所

橿考研での研修記

一、研修の概要

中国陝西省考古研究院と奈良県立
橿原考古学研究所（以下、橿考研）
の交流協定に基づき、私は二〇二四
年一〇月一日から二〇二五年一月
一七日までの三か月間、橿考研で研
修をおこないました。私は陝西省考
古研究院に勤務しておりますが、研
究分野は大規模遺跡の展示と活用に関
するものです。この度の研修では、
橿考研の皆様のご配慮のもと、日本
の重要な考古遺跡や研究機関を多数
訪れ、遺跡の保護や展示方法につい
て学ぶ貴重な機会を得ました。この
経験は、私の研究にとって極めて重
要なものとなり、大きな刺激を受け
ました。

研修期間中、以下の四つの主要な

松田真一・近江俊秀一九九一「山添村

布目川流域の遺跡6」『奈良県遺跡調
査概報一九九〇年度』奈良県立橿原考
古学研究所

光石鳴巳二〇〇一『縄文文化の起源を探
る』奈良県立橿原考古学研究所附属博
物館

朱 雨 霽

分野に焦点を当て、実地研修や学習
をおこないました。

二、各部門の見学

① 考古発掘部門

飛鳥宮跡の発掘調査現地説明会に
合わせ、東影悠さんの指導の下、飛
鳥宮跡の航空写真撮影影に向けた遺構
面の清掃作業に参加しました。

② 文物保護部門

中尾真梨子さんの指導の下、奈良
県御所市の北十三遺跡での出土品の
搬出作業をおこないました。また、
小倉頌子さんと共に、なら歴史芸術
文化村における収蔵品の環境モニタ
リングや、出土遺物のX線撮影にも
携わりました。



東大寺防災発掘現場を見学（右端は筆者）

③ 博物館部門

木村理恵さん、鈴木朋美さんの指
導の下、橿考研附属博物館における
展示準備作業に参加しました。特に
「ミステリー小説のなかに考古学が
登場する件」展と「東南アジアの洞
窟遺跡」展の準備に携わり、博物館
展示の実務を学びました。

三、博物館の展示とデザイン

日本各地の博物館の展示配置や管
理状況を実地調査しました。主な訪
問先は、九州国立博物館、九州歴史
資料館、東京国立博物館、奈良国立
博物館、また奴国の丘歴史資料館、
平城宮いざない館、高松塚壁画館な
ど遺跡に基づく博物館です。

四、考古遺跡の整備と活用

大宰府政庁跡、吉野ヶ里遺跡、一
乗谷朝倉氏遺跡などの整備がおこな
われた代表的な遺跡を実地調査し、
日本の遺跡保護および展示の実践に
ついて体系的に記録しました。研修
の後半には、「日本の考古遺跡展示
の方法と実践―九州および関西地域
を例に」と題した成果報告をおこな
いました。

五、公開活動

橿考研が主催するさまざまな公開
活動や普及活動にも参加しました。
具体的には、所内で実施される発掘
調査現場の現地検討会（毎月一回）、
富雄丸山古墳の蛇行剣と保存科学に
関する公開講演会、飛鳥宮跡現地説
明会、アトリウム展示に合わせて実
施された藤ノ木古墳出土金銅冠のペ
ーパークラフト体験活動などを通じ
て、日本の考古学成果を広く一般に
普及させる方法について理解を深め
ました。

六、研修前後の思い

橿考研に来る前、齊藤希さんは私
が訪問を希望する遺跡を細かく聞き
取ってくださり、適切な日本語学習
機関も探してくださったため、異国

の地でも安心して研修に臨むことができました。

この研修は私にとって初めての日本、そして初めての海外滞在でもありました。二〇二四年一〇月一五日、関西空港に到着した際、未知の環境に少し戸惑いもありましたが、齊藤さんと北井利幸さんが空港まで迎えに来てくださり、その後ラーメン屋に連れて行ってくださいました。この食事は単なる食事以上の意味を持ち、日本の温かいおもてなしの心を感じ、貴重な体験となりました。

研修期間中、檀考研の皆さんが温かいサポートと指導をしてくださり、充実した時間を過ごすことができました。齊藤さんには、研究面はもちろんのこと、生活のあらゆる面でご配慮をいただき、大変お世話になりました。米川裕治さんは、私が宿泊している周辺のスーパースーパーの地図を手描きで準備してくださり、日常生活が非常に快適になりました。川上洋一副所長は、一乗谷朝倉氏遺跡視察のために八時間も運転してくださり、新年の餅つきにも招待してくださいました。東影さんは、発掘現場での作業中に何度も質問に答えてくださり、環境に慣れるための助言をくださいました。鈴木さんは、博

物館での実習中に丁寧な指導してくださり、彼女の明るい人柄に励まされました。

また、岩崎郁美さん、内藤元太さんには学習や生活面で多くの助けをいただき、異国の地で温かい友情を感じました。さらに、黒澤ひかりさん、高木清生さん、西浦熙さんらには、多くの遺跡を案内していただき、その背景や関連知識について詳しく解説していただきました。

特に、奈良文化財研究所の楊萌研究員には、たくさんのご支援をいただきました。私たちは研究に関する専門的な交流をおこなうだけでなく、生活においても良い友人となりました。楊研究員の支援にも心から感謝申し上げます。

研修期間がちょうど日本の年末年始に重なったこともあり、伝統的な忘年会や新年会に参加し、日本文化への理解をより深めることもできました。

今回の研修を通じて、日本の考古遺跡の保護と展示方法に対する理解が深まっただけでなく、遺跡展示が公共教育や文化普及に果たす役割についても実感しました。また、同じ志を持つ研究者たちと出会い、学問的な視野が広がりました。この貴重な

な経験を活かし、今後の研究に努めてまいります。皆様にご心より感謝申し上げます。

檀原考古学研究所研修記

チャン
蔣 企 明
ギ ミヨ

一．はじめに

近かったことも作用したでしょう。

二〇二五年一月九日から三月二四日までの七五日間、檀原考古学研究所での研修のため滞在しました。研修のテーマは「弥生・古墳時代の国家形成過程と都城発展の比較研究」でした。結果だけをみれば半分成功でした。そもそも日本では、国の形成と都城発生の時期に違いがあります。国の導入期といえる初期国家は日本では古墳時代に形成されますが、都城は七世紀以降になつてはじめて現れるのです。仕方なく「選択と集中」をしなければならぬ状況でした。そこで私は「弥生・古墳時代の国家形成」に焦点を当てました。

二．古墳の踏査

日本列島は韓半島から文物が入ってくる九州一帯で、まず王墓が登場します。遠距離交易を象徴するものとして銅鏡だけを選んで圧倒的な数量を埋納する一方、初期から墳丘の大きさに目を向け、墓の外形でも被葬者の地位を表現しようとしたようです。紀元前一世紀から西暦一世紀にかけて最も有力な奴国、伊都国で発見された須久岡本遺跡D地点甕棺墓と三雲南小路遺跡甕棺墓は、そのような王墓の代表的な例でしょう。古墳時代に入り、前方後円墳が出現するにしたがい、日本の王陵の墳丘の規模は極端に大きくなります。五世紀前後からは、対外交流で入手した金工品や鉄製武器類が急増します。内部の副葬品にも階層性が明確化されるようになります。

王陵は墓の被葬者の地位を反映し



3月5日、小雨のなか豊中市・御獅子塚古墳にて
(右は米田敏幸所員)

ながらも、次の後継者にとっては権力継承の空間でした。そのような側面から、王陵の築造、儀礼のパフォーマンスなどを通じて、弔問者が王陵の空間で感じる共感重要にならざるを得ません。この部分で韓半島南部と日本列島は克明な違いがあると予想されますが、それは王陵自体と王陵が集まってつくられた景観があまりにも違うからです。

百済、新羅、伽耶は墳丘の大きさ、副葬品の多寡において差はあるものの、王陵と有力な墓が調和し、共同的景観を形成しています。つまり、王陵同士、あるいは王陵とそれ以下の古墳の間でその関係を明示し、社会組織を反映しようとしたのです。

一方、日本の前方後円墳の王陵は、古墳の規模が大きい上、周囲の陪塚も小規模墳を配置するだけで、生前に関係を結んだ有力者が同じ墓地に一緒に埋葬されることはありません。また、前方後円墳の王陵自体においても、周濠に囲まれる点と、それによって接近が困難な点は、そもそも独立的な配置を意図したものとも見て取れます。以上のようなことは、王陵とそれを取り巻く景観が社会組織とどのように結びつくのか、領域別に比較してみるべき課題だと思います。

三、終わりに

今振り返っても日本での時間はとても幸せでした。瞬間瞬間がいつも楽しかったです。九州に初めて行った時も、箸墓古墳を見て驚いた時も、大阪を一日中歩いて王陵を見学した時も、徳島に行くために船に乗った時も、東京で博物館を見て、とても古い居酒屋に行った時も、常に楽しかったです。そして日本語が上手くできない私と一緒に話をしながら、様々気遣いをくださった方たちにも感謝いたします。いつか皆さまが韓国に來たら必ず恩返しをすると誓います。

信立祥博士を偲んで

茂 木 雅 博

私は二年前に七年振りに中国政府から招待されて、日本中国文化交流協会主催の訪中団に加えて頂いた。その折に信立祥博士夫妻と北京のホテルで久しぶりにお会いすると、二人ともに大変元氣であった。ところが昨年の暮れに信さんの長女から彼が肺癌の末期であると知らせられた。今年に入り王建新・袁靖氏に見舞って欲しいとお願いしておいた

も感謝です。私よりも五歳も若い先生が先に逝かれた事が残念でなりません。どうぞ宋さんが一日も早く元氣になられ、信さんの分も長生きしてください。(合掌)というものである。

ら、新年早々三人で撮られたスナップが袁氏から送信され、信さんが大変お瘦せになられて居り、案じていた矢先の計報であった。

私と信さんとは橿原考古学研究所で出会った。私は一九八七年五月一日から一〇ヶ月間内地留学として「前方後円墳の研究」をテーマに研修した。信さんは同年一〇月一日から一年間中国歴史博物館から留学生として訪日されたのである。同時に社会科学院考古研究所から王巍さんも加わり、三人で机を並べて研修した間柄である。当時の研究所は現在のように整備されておらず、所員も少なく開発のための発掘調査に追われている状況であった。

元中国国家博物館教授信立祥博士は肺癌のため、三月二六日未明逝去された。七八歳であった。私はその日のうちに奥様の宋淑梯さんに次の様な弔電を送った。それは「信立祥先生のご逝去を心よりお悔やみ申し上げます。一九八七年來諍友として多くの事を学ばせて頂き、中国の多くの友人を紹介して頂いた事は私の人生にとって忘れる事は出来ません。橿原考古学研究所で一年、茨城大学で二年も一緒にさせて頂いた事

が、日本語が不十分で必死に勉強をされていたのが印象的である。二人は県立医大の学生寮に住んで居り、日本語会話の勉強のために三人でよく食事をしたのを覚えている。特に私は奈良県下の陵墓資料の探索と前



檀考研の玄関にて 帰国前に（右は筆者）

方後円墳を全踏査するための研修を目的としたので、一〇月以降は自家用車で一日五基と決めた古墳踏査に二人を同行することが多かった。特に信さんは紅葉を大変喜ばれ多武峯や吉野の散策を楽しまれた。さらに日本語は日々上達し、三月の関東地方研修の際には茨城大学で「最近の発掘調査から」というテーマでの講演を日本語でおこなっている。この研修では奈良で見学できない日本考古学史上著名な縄文時代の貝塚を見学して頂いた。具体的には加曾利貝塚・陸平貝塚・広畑貝塚・浮島貝塚・大串貝塚などである。

留学が終了して帰国後、天安門事件が勃発すると、同じ頃高等教育の

研修で留学していた西安の友人が学生を支援したとして逮捕され、減刑嘆願をした私は三年間訪中することが困難となった。その間に私は茨城大学大学院（人文科学研究科）創設委員に推薦され、一九九一年度に設置が承認された。そこで院生に彼の研究テーマである「漢代画像石の研究」を講じて欲しいと嘆願した。歴史博物館館長の兪偉超先生から一年間という条件でお許しが得られ、信さんは一九九四年四月一日付けで助教授として採用された。私は彼の許可を得て、毎週この講義を受講するのが楽しかった。

受講生の評価は大変よく、一年間の継続延長を教授会も希望した。そこで私は訪中して兪館長に事情を説明し、更に著作を刊行し博士論文にさせたいので一年の延長を願い出した。兪先生は「一年ですよ」と言ってお許しくださった。私は帰国して彼に「博士論文を完成させる」という条件で兪先生から許可が出たことを伝え、友人の出版社に『中国漢代画像石の研究』の刊行を依頼した。そして一年間、公務は一切私が代替えることにして、執筆に専念して頂いた。秋にはほぼ完成したので、それを東京大学文学部長の藤本強先

生に見て頂いた。一年はあっという間に過ぎ一九九六年三月二〇日に水戸市内のホテルで出版祝賀会と送別会を兼ねた盛大な会が開催され、檀考研関係者からも勝部明生・泉森駿・前園実知雄・宮原晋一・玉城妙子氏等が出席して下さった。

『中国漢代画像石の研究』は東京大学文学部の藤本強教授を主査に尾形勇教授・池田知久教授・今村啓爾教授・大貫静夫助教授を副査として審査がおこなわれ、一〇月二五日二時から法文一号館四二〇教室で口頭試問がおこなわれ、藤本先生は推薦者として私に二〇分程、信さんの人となりを質問された。その後一時間以上にわたりおこなわれ、三時三〇分終了する。更に翌日哲学教室の池田知久教授主催の研究会で「漢代画像石から見た漢代人の宇宙観」を講演する。この結果は藤本先生が三月に退官されたために後任の青柳正規教授を委員長として吉川弘之学長から平成八年十一月一日付けで「博士（文学）」の学位が授与された。

その後、信さんは孔望山遺跡、班村遺跡、劉賀墓等中国を代表する遺跡の調査をおこなわれた。

こんなに突然お別れするとは思いませんでした。もう少ししたら私も

常世へ参ります。そうしたらまた遺跡巡りを楽しみましょう。（合掌）

ひとの動き

（退職 令和七年三月三一日付）

大峯朝記 副所長

米川仁一 調査課副主任

↓調査課主任研究員（再任用）

小倉美由紀 総務課主任主査

↓総務課主査（再任用）

東田 浩 総務課主査

（転出 令和七年三月三一日付）

佐藤秀樹 総務課総務係長

↓郡山土木事務所庶務工事課長

岡田憲一 調査課調査第二係長、世界遺産室世界遺産係調整員兼務

↓同 総括研究員、文化財課記念物・埋蔵文化財係調整員兼務、世界遺産室世界遺産係調整員兼務

辰巳祐樹 調査課主任研究員

↓文化財課兼務

（転入 令和七年四月一日付）

吉房あずさ 会計局会計課主任主事

↓総務課主任主事

（転入・昇任 令和七年四月一日付）

田中裕之 地域創造部人権施策課長

↓ 副所長

本村充保 調査課総括研究員、文化財課記念物・埋蔵文化財

係調整員兼務、世界遺産

室世界遺産係調整員兼務

↓ 調査課長、世界遺産室室長

重見 泰 学芸課指導研究員、文化財課兼務

↓ 同 学芸係長

(昇任 令和七年四月一日付)

青柳泰介 学芸課副主幹、学芸係長

兼務

↓ 学芸課長

杉原逸貴 総務課主査

↓ 同 総務係長

東影 悠 調査課指導研究員

↓ 同 調査第二係長、世界遺産室魅力発信係調整員

兼務

平井洸史 学芸課主任技師

↓ 同 主任研究員

前田俊雄 調査課主任研究員

↓ 同 指導研究員

谷川 遼 調査課技師

↓ 同 主任技師

富田 樹 調査課技師

↓ 同 主任技師

松尾樹志郎 調査課技師

↓ 同 主任技師

横山 舞 調査課技師

↓ 同 主任技師

(所内異動 令和七年四月一日付)

鈴木裕明 調査部長、調査課長事務取扱、世界遺産室参事兼務

↓ 調査部長

吉村和昭 学芸課長

↓ 同 副主任(役職定年)

伊東菜々子 学芸課技師

↓ 調査課技師

(兼務 令和七年四月一日付)

水野敏典 資料課長

↓ 保存科学センター所長兼務

奥山誠義 資料課総括研究員

↓ 保存科学センター兼務

河崎衣美 資料課主任研究員

↓ 保存科学センター兼務

小倉頌子 資料課主任研究員

↓ 保存科学センター兼務

中尾真梨子 調査課主任研究員

↓ 保存科学センター兼務

北井利幸 企画課指導研究員

↓ 万葉文化館兼務

(新規採用 令和七年四月一日付)

中村 伶 総務課主事

北 将伍 調査課技師

「県立橿原考古学研究所 保存科学センター(C.C.K.)」設置について

令和七年四月一日付けで保存科学センターを設置した。職員五名、会計年度任用職員一〇名で構成され、センター長は資料課長が兼任し、副所長が指名した資料課、調査課の職員が兼務する。発掘調査で出土した脆弱な文化財を保存し、後世に遺すため、出土品の保存処理、構造・材質調査、保管・展示環境の管理、技術的指導・助言を行う拠点とし、専門能力のさらなる向上をはかることを目的とする。

これに先立ち、三月三〇日に保存科学センター看板の除幕式を実施した。



保存科学センター(C.C.K.)除幕式にて
(左上：新設した看板)

アトリウム展示案内

研究所一階アトリウムでパネルを中心に展示しています。科研費をはじめとした研究助成による研究成果展「研究員による最新研究成果二〇二五」を七月四日から開催します。詳細はホームページなどで公開します。観覧時間は月曜日から金曜日の八時三〇分から一七時一五分です。

附属博物館展示案内

「大和を掘る40」

会期…令和七年七月一九日(土)

～ 九月七日(日) ～

二〇二四年度発掘調査速報展「大和を掘る40」では、奈良県内で昨年度に発掘調査された遺跡を中心に、出土遺物・調査写真パネルを展示いたします。奈良県における最新の発掘調査の成果を多くの方々にご覧いただき、豊富な文化財を確認するとともに、奈良県の魅力を知っていただきたいと思います。

【土曜講座】(全四回)

七月二六日(土)、八月九日(土)、
八月三〇日(土)、九月六日(土)
各回ともに一三時～

橿原考古学研究所 講堂